

『子どもたちの育ちを見つめて』

村石 京 (フレーベル館)

お茶の水女子大学
附属幼稚園の生活から

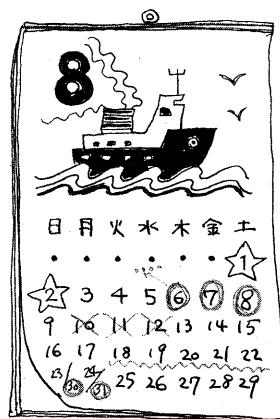
勝部 真長

ことし定年で退官された附属幼稚園教頭の村石さんこの本を手にして、この三十数年の時の流れをふりかえりつつ、私自身もある感慨にふけっていたでした。お茶大の学生の時は、旧姓石黒さんといつて可愛いお嬢さんで、私の講義をとつていらしたのですが、その答案の字のきれいなと、よくま

「回心」ともいうべきものを語った本である。日本エッセイストクラブ賞を受賞したこの本の見事な「文体」は、医者としては珍しい心理描写の才などから来るものではなく、患者の内面に入つてゆく想

像力の豊かさ、もつと言えば患者の「人間」に対する愛そのものから生まれ培育されたものであることを、読む者は実感せざるを得ない。

(お茶の水女子大学)



とまつた内容とで、私の印象に残っている人でした。ただ石黒さんというのが二人いて、時々間違えたりしました。しかし幼稚園にお勤めになつてからは村石さんとなつて間違えることなく、その本当に真摯な子どもたちへの接し方に感服していました。講演とか執筆とか、学校の外の活動に気を散らすこ

となく、つねに内向きに子どもの世話を明け暮れている姿を遠くから見ていました。私も園長として四年間、ご一緒につとめたことがありましたから。

昨年、新しくなった新教育要領では、「環境」と「人間関係」の二つが目玉となって、注目を引きますが、これもお茶の水の幼稚園では、倉橋惣三先生の昔から、とりあげてきた「誘導保育」とか「自由保育」とかいわれるものの中に、すでに早くからとり入れられていたものです。

その倉橋理論に始まるお茶の水の伝統的な自由保育を、全身で身につけて、三十年余にわたって実践してこられたのが、村石さんであつたといつても決して言いすぎではないでしょう。

そのことは、この本を読んで痛感させられるところです。とくに第三章9の「自由保育について」をみると、よく分かります。また第四章6の「遊びの中で育つ子ども」を読むと、長い間、実践してきた人でなければ書けない保育の究極のものが、表現されています。

たしかに一斉保育が「チイチイ・パッ・パチイ・パッ」の「雀の学校」のようにムチを振りふりの保育であつたとすれば、自由保育は「メダカの学校」なので、川の中で、一寸のぞいてみれば分かるように、子どもと保育者とは対等なのです。しかし、その対等等ということがとても難しく、いわば心理学でいう「アクセプタンス」（受容性、子どものニーズ）を全面的にそつくり受け入れること）が保育者の側にないと成り立たないのですが、この本の至るところで、村石さんは、その奥の深いアクセプタンスを実例をあげて説明しています。

横綱が弟子に胸を貸して、ドンドンぶつかって来させて稽古をつけるのよりも、もっとむずかしいのが、大せいの幼児たちの突進を受けとめる保育者の柔軟な包容力であるといつていでしよう。しかも後ろですねいてぶつかって来ない園児たちにも目をやり、誘い出さなくてはならないのですから。そうした工夫が、第一章の年間のリズムにのつた指導から第二章のいろいろな出来事を通しての具体例を

通して、描かれています。

「発達とは基準としてみるのでなく、『個々の発達の過程』と考え子ども一人ひとりの発達の道すじを大切にする」(26頁) ところに、保育の新しい目が

開けてゆくことを、この著者は三十年の蓄積の上にたって、言い残してくれているのです。貴重な発言だと思います。

(元・お茶の水女子大学)

『ギラギラ』

西田俊也 (マガジンハウス)

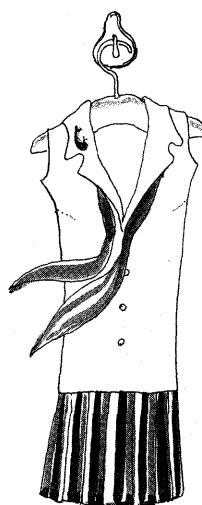
『サマータイム』

佐藤多佳子 (MOE出版)

皆川美恵子

夏の日の読書にふさわしい児童文学の本二冊を紹

させられる。



介してみたい。著者たちの文体には、今までの児童文学の文体とは大いに異なる、新しいリズムが息づいている。ともに一九六〇年代生まれの若き作家であり、日本の児童文学の世界にも、ようやく時代の感性が新しい波となって発信され出したことを実感

『ギラギラ』は、まるでハード・ロックのビートが力強く打ち出されたかのような躍動するリズムの文体である。『サマータイム』の文体はそこへいくと、ジャズを都会風に洗練させ、クールでありながら人の息の温みも感じさせる弾みのある響をもつて